

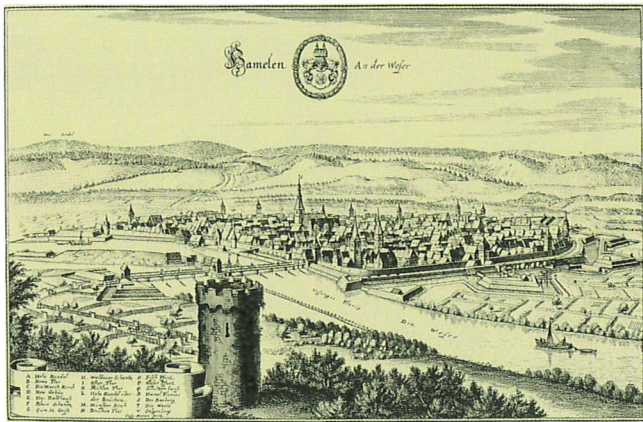
ハーメルンの笛吹き男

1284年、ハーメルンの町に、ある一人の風変わりな男が現れました。彼は色鮮やかなコートと派手なスカーフを身にまとい、自ら「ネズミ取り男」と名のついていました。彼はお金と引き換えに町中のネズミを追い払うと約束し、市民らは彼の申し出た報酬額を承諾しました。ネズミ取り男は笛を取り出し、吹き始めました。すると、すべての家からネズミが這い出てきてこの男のまわりを集まってきました。すべてのネズミが外に出てきたところで、この男はそのまま町を出てヴェーザー川へ向かって歩き出しました。ネズミたちは皆、彼の後についてゆきヴェーザー川の水の中に飛び込んでおぼれてしまいました。しかし、町の市民たちはやっかいなネズミの被害から解放されると、ネズミ取り男との約束を後悔し、報酬の支払いを拒絶しました。こうして、この男は不快な気持ちのまま、しかたなく町を去ってゆきました。

ところが6月26日、彼は再びこの町に戻ってきました。今度は狩人の格好をし、赤い奇妙な帽子をかぶっておそろしい顔つきでやってきました。町の市民たちが教会に集まっている間、彼の笛の音が路地から鳴り響いてきました。しかし笛の音に惹かれて集まってきたのは、なんとネズミではなく町の子供たちでした。4才以上の男の子や女の子が大勢歩いてきました。これらの子供たちは、ネズミ取り男の笛の音にあわせて遊ぶように彼の後をついてゆき、東の城門をくぐりぬけ、どこかの山のかなたに消えて行ってしまいました。

町には、他の子供たちについてゆけなかった二人の子供が戻ってきました。一人は目の見えない子だったので、子供たちの歩いていった場所もわからず、もう一人は口の聞けない子で、子供たちの行方を伝えることができませんでした。また、さらにもうひとり、男の子が上着を取りに戻ってきたため、助かりました。子供たちはある洞窟の中に連れられてゆき、ルーマニア中部のジーベンビュルゲンに再び現われたと言う人々もいます。この出来事で130人の子供たちが姿を消してしまっただけのことです。

(グリム兄弟「ドイツの民話」より)



伝説の歴史的背景

「ハーメルンの笛吹き男」は世界中で最も良く知られた童話として挙げられます。この物語はおよそ30の言語に翻訳され、多くの国々で学校教育の授業プログラムにも取り入れられています。この物語が歴史的事実であるかどうかは今日まで明らかになっていませんが、より信憑性の高い解釈としてはドイツ東部地域（シュレージエン、メーレン、ポメルン、プロイセン地方）への市民らの入植が考えられます。当時、貴族たちがハーメルン市民を率いて東方植民していたことが明らかになっています。特にオルミュツツ（現在のチェコ）地方に移住したシャウムブルク伯爵の名はよく登場します。また、当時町の住民たちは「町の子供たち」と呼ばれることが多かったという事実からも推測できます。「ネズミ取り男」とのつながりは、その時代によく起こったネズミの大被害に由来しており、実際のネズミ取り男は、物語よりもっと現実的な方法でネズミ退治をしていたことでしょう。これら二つの史実が、人々の間で語り継がれてゆく間に一つの物語として合体していったのではないかと見られています。

「ハーメルンの笛吹き男」についてのより詳しい資料やご案内はハーメルン博物館までどうぞ（所在地：Osterstraße 8,9）